

岡山大学のニュース&トピックスおよび最新情報は岡山大学のホームページからご覧いただけます。

<http://www.okayama-u.ac.jp>

## 6 June

16日 環境管理センターが公開シンポジウム「環境とエネルギー」を開催



22日 定例記者発表を開催

26日 まちなかキャンパス城下下ステーションがオープン

地域総合研究センター(AGORA)が取り組んでいる、学生が市民と対話しながら地域の課題解決を目指す「まちなかキャンパス事業」を充実させるため、初の学外拠点となる「まちなかキャンパス城下下ステーション」が岡山市北区石関町にオープン。城下下ステーションは、岡山市内中心部の好立地や周囲の景観の良さを活かして、本事業で有効活用するほか、その他のゼミやサークル活動での利用も見込んでいる。

## 7 July

9日 ガーナの教育関係者が本学で研修を開始  
ガーナ共和国の小学校教員ら教育省関係者12人が、本学教員の指導のもと理数科教育を学ぶ研修が始まった。独立行政法人国際協力機構(JICA)の国別研修(Country Focused Training Program)の一つで、研修期間は約2か月間。



17日 台北医学大学口腔医学院と本学歯学部が部局間交流協定



18日 環境マネジメントについて学ぶ「サステイナブルセミナー」を開催

18日 タバコ対策推進キャラクター優秀作品を発表

19日 定例記者発表を開催

26日 資源植物科学研究所に「倉敷ゲストハウス」がオープン

資源植物科学研究所に、倉敷ゲストハウスがオープン。同研究所は学外から多くの研究者が集う共同利用・共同研究拠点であることから、共同研究者らの宿泊や役職員の会合などに活用。ゲストハウスは鉄筋コンクリート2階建て。シングル10部屋、ツイン2部屋があり、各部屋にバス・トイレを完備。長期滞在も可能。



## 7 August

31日 「第7回高校生・大学院生による研究紹介と交流の会」を開催

大学院自然科学研究科は「第7回高校生・大学院生による研究紹介と交流の会」を創立五十周年記念館で開き、岡山県内外18校の高校生と本学大学院生ら約550人が、日ごとの研究成果を発表して交流を深めた。ステージとポスターで、高校生81件、大学院生21件の研究発表を実施。



## 8 August

1日 特別講演会「最後の素粒子ヒッグス」を開催



1日 「家族の日」を開催  
ダイバーシティ推進本部次世代育成支援室は、本学教職員の家族を招き、普段の仕事ぶりなどを見学・体験してもらう「家族の日」を開催。教職員とその家族19組51人が参加。オリエンテーションの後、学長室で森田潔学長と名刺交換し、インタビューや記念撮影などを行った。工学部創造工学センターの協力による「わくわく実験教室」も開かれ、6種類の実験ブースを楽しんだ。教職員の職場も訪れ、実際に仕事する姿も見学した。

## 8 September

3・4日 オープンキャンパス2012を開催

津島、鹿田両地区で開催し、岡山県内外から高校生ら延べ約18,800人が訪れた。全11学部とマツチングプログラムコースが、それぞれプログラムを企画。高校生は、希望の学部で模擬授業を受けたり、大学全体の雰囲気味わったり、岡大ライフを体験した。



7日 第3回集まれ！市民のエンライフ&テクノロジーを開催

11・12日 共用試験歯学系OSCE外部評価者養成ワークショップを開催

## 9 September

4日 ポスドク・博士課程大学院生のための第1回講演会・企業との交流会を開催

## 研究・臨床成果

■大学院医歯薬学総合研究科の秋山謙太郎助教授らの研究グループは、これまで詳細が不明であった全身性免疫疾患に対する間葉系幹細胞移植の治療メカニズムの一端を解明した。今後、より効果が高く、副作用が少ない間葉系幹細胞移植治療、さらには幹細胞由来因子による自己免疫疾患治療の開発が期待される。米科学雑誌(Cell Stem Cell)に掲載。(6月・定例記者発表)

■大学院自然科学研究科の水島健助教授らの研究グループは、スカーミオンと呼ばれる素粒子の理解に不可欠な構造を現実世界に安定に作り出すことを世界で初めて提唱した。この成果により、巨大な実験施設を用いずとも素粒子理論の検証が可能になると期待される。米物理学会速報誌(Physical Review Letter)誌オンライン版に掲載。(7月・定例記者発表)

■資源植物科学研究所大妻・野生植物資源研究センターの武田真教授らの研究グループは、オオムギの芒の長さを決める遺伝子特定した。オオムギのほとんどの品種は長い芒を持つが、東南アジア地域に存在する短芒型の遺伝子は、風雨による穂の抵抗が少なく植物体が倒れにくい。この遺伝子の品種改良への活用が期待される。英国植物学専門誌(Journal of Experimental Botany)電子版に掲載。(7月・定例記者発表)

■異分野融合先端研究コアの能年義輝助教授らの研究グループは、病原体に感染したときだけ植物の免疫力を高め、耐病性を向上させる化合物フラントアクテイベーターを新たに5個発見し、その作用メカニズムを解明した。植物に持続的な耐病性を付与する新技術の開発が期待される。米科学誌(The Plant Cell)オンライン版に掲載。(9月・臨時記者発表)

